

2020年に向けたマルチステークホルダー会議

～参加と協働～

議事録

日時：2016年8月3日（水） 10：00～12：00

場所：プラザエフ 4F シャトレ

出席者：18名（敬称略）

Dr. Mervyn Jones （Sustainable Global Resources）

◇中央官庁（オブザーバー）

川上大二 環境省 大臣官房廃棄物・リサイクル対策部企画課リサイクル推進室

◇（公財）東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会（オブザーバー）

林 俊宏 大会準備運営第一局 持続可能性部 持続可能性企画課長

本橋 淳 大会準備運営第一局 持続可能性部 持続可能性計画課長

鈴木裕子 大会準備運営第一局 持続可能性部 持続可能性計画課 係長

佐橋俊亮 大会準備運営第一局 持続可能性部 持続可能性計画課 主事

◇教育機関

多田千佳 東北大学大学院 農学研究科付属複合生態フィールド教育研究センター
動物環境システム学分野 准教授

◇企業・団体

大塚靖雄 江ノオリンピック盛り上げ隊

岩元美智彦 日本環境設計(株) 代表取締役会長

石井遼介 日本環境設計(株) シニアマネージャー

末松建樹 こどもエコクラブ全国事務局 参事

高橋一伸 日本マクドナルド(株)

中島 悠 (株)グリーンアップル 代表取締役

羽仁カンタ SUSPON 代表

余伝 雄 トヨタ自動車(株) 環境部 調査G主任

中川 淳 サーフライダーファウンデーションジャパン

■コーディネーター

崎田裕子 NPO 法人持続可能な社会をつくる元気ネット 理事長

鬼沢良子 NPO 法人持続可能な社会をつくる元気ネット 事務局長

プログラム：

1. 開会・趣旨説明
2. 「NGO・企業の参加と協働」 ジョーンズ氏プレゼンテーション
3. 質疑応答
4. 情報提供「こんな参加と協働ができます、考えています」
5. 質疑応答&意見交換
6. オブザーバーからの感想・その他

1. 開会・趣旨説明

崎田より、本会合の趣旨説明が行われた。

- ・ 持続可能な社会をつくる元気ネットは、地球環境基金の助成を受け、2013年度から2015年度の3年間にわたり、各種リサイクル法見直しに向けた「マルチステークホルダー会議」を行ってきた。その枠組みの中で、2014年に欧州を視察し、2012年ロンドンオリンピックの関係者から話を伺った。
- ・ ロンドン視察の中で出会ったジョーンズ氏のお話の中では、「オリンピックを通して、その後の社会に変革をもたらすレガシーを作るための戦略を立てた」「多くのステークホルダーとのパートナーシップで大会を運営した」という話に強い感銘を受けた。
- ・ 2015年に元気ネットとして、ロンドン視察の様子をまとめた書籍を出版した。また、同年8月にはジョーンズ氏をお招きして、勉強会を開催した。本年も、細かい具体的なお話をお聞きしたいと思い、ジョーンズ氏をお招きした。
- ・ 午前中のこの会議は、マルチステークホルダー会議のスタイルで、五輪に向けた企画をお持ちの民間の企業・団体の方々のお話を聞き、お互いに意見交換を行う機会としたい。

2. 「NGO・企業の参加と協働」 ジョーンズ氏プレゼンテーション（詳細は別添資料参照）

- ・ オリンピック組織委員会は、世界で最も大きなショーである五輪を時間通りに開催するという重大な責任を負っている。ロンドンオリンピック・パラリンピック組織委員会（LOCOG）は、様々なステークホルダー（組織委員会内部の様々な部署、ロンドン市、地域のパートナーやスポンサーなど）とパートナーシップを結び、大会運営を成功させた。そのことは、時間を守るだけでなく、予算や、持続可能性に関わる様々な目標を守ることにもつながった。
- ・ 組織委員会は、大会をゼロから作り、完了させるまでの全てにあたらなければならない。組織委員会には、科学的証拠に基づいた知識をベースに、サプライヤーに適切な質問をする能力が求められる。サプライヤー側は、十分な時間を用いて、組織委員会が設定した目標を達成できるようなソリューションを提供する必要がある。双方が、

求められる品質・要件を十分に理解する必要があるということである。

- ・ ロンドン五輪は、様々なステークホルダーが関わり合う機会となった。需要側は、持続可能な様々な製品へのアクセスを作り出した。供給側は、外部のサプライヤーがどのような製品・サービスを供給できるのか理解し、使用可能なテクノロジーを理解し、供給を通じてリスクをどう最小化できるかを理解した。
- ・ 外部ステークホルダーとの関係性強化、協働の強化に役立ったものとして、ISO20121が挙げられる。規格の中では、イベントに関係する機関を特定すること、外部の支援を活用しマネジメントにあたること、外部リソースの活用、第三者機関による評価、自律的なガバナンス、説明責任などが重要な要素として挙げられている。
- ・ 五輪は、参画したステークホルダーがレガシーを得る機会となった。五輪で得られたレガシーは、五輪後も、例えば2016年の英国のスポーツイベント、欧州ゴルフ大会などで活用された。
- ・ 企業の立場では、経済成長を維持しつつもコスト削減ができ（デカップリング）、政府の立場では、リサイクル目標を達成するための実証をすることができ、NGOの立場では、持続可能な生活のあるべき姿、そのための教育や訓練の機会となった。
- ・ 2020年の東京五輪は、東京という地域での様々な取り組みや、市民参加の機運を高める機会となるだろう。
- ・ ロンドン五輪では、サプライヤーの70%以上が中小企業であり、また、35%以上が地元のサプライヤーだった。これは、我々にとってひとつの誇りとなっている。

3. 質疑応答

ジョーンズ氏の説明に対する質疑応答がなされた。主なものを以下に示す。

Q.ロンドン五輪では、サプライヤーの多くが中小企業だったという話があったが、それが成功した秘訣があれば教えてほしい。(中島氏)

A.ロンドン五輪では、LOCOGが、「サプライヤーの70%を地元のサプライヤーに」という目標を掲げていた。それを実現するために、早い段階から、サプライヤーに求める要件を定めた。調達、サービス、製品、原材料についてのガイダンスを早い時期に作成した。その上で、サプライヤーにそれらの内容を通知し、サプライヤーの対応を待つ、というプロセスを踏んだ。そして、組織委員会とサプライヤーの対話の場を設け、要件を達成するための方法を話し合った。

組織委員会は、優先順位の高いものから着手した(例:カーボンフットプリントの削減、資材の消費量の低減、食品ロス削減など)。具体的なカテゴリー別にワークショップを開催し、想定されるサプライヤーとの対話の機会を設けていった。このような取り組みの中で、中小企業が参加できる枠組みが出来上がっていった。

これらの取り組みを、五輪が開催するまでの4年間で段階的に進めていった。

組織委員会は、全体的な期待値を設定し、細かい内容までは目標を設定しなかった。むしろ、サプライヤー側に、どういうことができるのかを考えてもらうようにした。その結果、五輪という大きなイベントにおいて、大手のサプライヤーや主要なスポンサーが、中小企業とパートナーシップを組んで、サービスを提供することができた。(本来ならば五輪に参加しないような中小企業が、大企業の下請けとなることで、五輪の場で独創的なサービスを提供する機会を得ることができた)

2016年にグラスゴーで開催されたコモンウェルスゲームズでは、食品を堆肥化する会社が参画し、大会の中で発生した食べ残しを堆肥化し、慈善団体に配布する取り組みが行われた。

4. 情報提供「こんな参加と協働ができます、考えています」

5つの企業・団体より、オリンピックやその先に向けた取り組み事例・案が紹介された。

①(株)グリーンアップル 中島氏 (詳細は別添資料参照)

- ・ (株)グリーンアップルは、ロハスフェスタ、アースデイ東京、フジロックフェスティバルなどのイベントの運営に携わっている。「イベントには未来を変えるチカラがある」を掲げ、そのチカラを社会的課題解決の推進力としている。
- ・ 東京五輪で考えられる(予定している)取り組みを紹介したい。
 - イベント会場近隣での森づくり：フジロックフェスティバルでの実績あり。イベントで使う割り箸、チラシ、ポスターを、その地域の森から作る取り組み。割り箸などは多少割高にし、その収益を次の植林につなげていく。
 - イベントのエネルギー自給率100%を目指す：市民から回収した使用済み天ぷら油をリサイクルし、イベントの電力やバスの燃料に活用する。市民から使用済み天ぷら油を回収するシステムを構築する必要がある。
 - リユース食器の活用：イベントにリユース食器を導入し、容器のごみを減らす。五輪で大量に製造されたリユース食器は、その後、全国各地の様々なイベントで活用する形にしてはどうか。
 - 環境配慮の指標(フードマイル等)を食べ物に表示する：その食べ物を作るためにどの程度CO₂が発生したのか、などを表示する。五輪において、東京近辺の食材を利用することにつながるのではないかと。

②江ノオリンピック盛り上げ隊 大塚氏 (詳細は別添資料参照)

- ・ 東京五輪のセーリング競技は江ノ島で開催される予定である。江ノオリンピック盛り上げ隊は、市民にオリンピックに関心を持ってもらうための場作りなどを行っている。
- ・ 江ノ島会場でのセーリング競技開催を受け、昨年、逗子市小坪地域に選手用の宿泊施設や防波堤が建設される開発計画が明らかになった。海の環境が悪化するのではないかと

の懸念から、地元で反対運動が行われた。ただ、反対をしているだけでは問題（宿泊施設をどうするのか、ヨットはどこに停泊するのか等）は解決されない。多くのステークホルダーを巻き込み、話し合いの場を作る必要があると感じたことが、盛り上げ隊発足のきっかけとなっている。

- ・ 五輪を主催するのは組織委員会、競技に出るのは選手、大会を支えるのは様々な企業である。一方で、五輪後の社会（レガシー）と最も結びつきが深いのは市民である。五輪後につながるよりよい社会を作るためには、市民が五輪に関心を持って参加することが必要となる。
- ・ 湘南地域には、五輪誘致決定以前から、海の自然を守る活動をしている団体が数多く存在する。彼らは、五輪を機に、きれいな海で選手やゲストを迎えたい、という気持ちで様々な活動に取り組んでいる。
- ・ ブルーフラッグ認証：水質、環境教育、安全性など、様々な厳しい基準をクリアしたビーチに与えられる国際認証。日本では、由比ヶ浜と福井県高浜町和田地区が、アジアで初めて、同時に認証を取得した。盛り上げ隊は、このような取り組みの紹介、後押しをしていきたいと考えている。

③東北大学 多田氏（詳細は別添資料参照）

- ・ 東京五輪の聖火をバイオメタンで燃やすことを目指した取り組みを行っている。世界初の取り組みであること、市民が参加可能で環境教育促進に役立つこと、環境負荷削減に資すること、（特に東北地方に対して）震災からの復興、希望の火をともしことができると考えている。
- ・ 鳴子温泉に導入した温泉廃湯を利用した小規模メタン発酵システムでは、旅館や家庭から集めた生ごみ（12kg/日）を発酵させ、1日50リットルの液肥を得ている。液肥を用いて野菜を栽培し、それが家庭や旅館で使われるというループができています。また、発酵システムからは同時に1日1300リットルのバイオガスが得られ、ene café METHANEではそれを用いてお湯を沸かし、お茶を提供している（お茶100杯分のエネルギーが得られている）。この仕組みを、五輪の聖火に転用したいと考えている。
- ・ 関連技術として、ペットボトルに新材料の粘度フィルムをコーティングし、ガスバリア性能が高く、軽量のボトルを開発した（各地で作られたバイオガスを簡易に運搬可能）。
- ・ 各地から集められたバイオガスを精製し、中圧ボンベ（重量2トン、0.7MPaで50～60Nm³のバイオメタンが入る）で運搬する計画となっている。中圧ボンベは資格がなくても取り扱いが可能である。
- ・ 石巻にある旧国立競技場聖火台を用いた燃焼実験も成功している。
- ・ 10月10日には石巻での聖火イベントを開催予定。それに向け、石巻市、大崎市、静岡など12か所で出前の環境教育を行う。関東の開催地が少ないので、協力いただける団体があればありがたい。

④SUSPON 羽仁氏（詳細は別添資料参照）

- ・ 持続可能なスポーツイベントを実現する NGO/NPO ネットワーク (SUSPON) は、2020 年東京五輪を持続可能な大会とすることをきっかけに、その後の東京、日本や世界の持続可能な社会づくりにつなげていくことを目指し、関心を寄せる NGO/NPO がお互いに情報交換をしつつ、自ら当事者として活動し、関係団体にはたらきかけていくことを目的に設立された。
- ・ 五輪だけ、1つの団体だけ、ではなく、連携して日本が変わるきっかけにしたい、との思いで会を立ち上げた。
- ・ 現在は「ごみゼロ」「責任ある資材調達」「気候変動・エネルギー」「企業の社会的責任」「生物多様性」の5つの部会がある。今後、必要に応じて増やす予定。
- ・ 月に1回の全体会、偶数月に1回の部会ごとのステークホルダー会議を通じて、提言活動を行っていく。また、提言だけでなく、様々な実践活動（食に関するイベントでのリユース食器の導入など）にも取り組んでいく予定である。

⑤日本環境設計(株) 岩元氏（詳細は別添資料参照）

- ・ 携帯電話から回収された貴金属を用いて、東京五輪の金・銀・銅メダルを作る取り組みを提案している。国民1人1人が、使い終わった携帯電話がメダルになるという記憶に残る体験をし、環境貢献の文化をレガシーとして残したいと考えている。
- ・ 市民の多くは、「楽しく」環境貢献に参加したいと考えている。日本環境設計は、そのための場作りに取り組んでいる。これらの取り組みは五輪後も活用できるレガシーとなる上に、海外にも輸出できる。
 - 幼稚園で携帯電話を回収し、幼稚園の運動会のメダルを作る。
 - PLA-PLUS プロジェクト：様々な企業に協力いただいて、楽しくプラスチック製品を回収するイベント。
 - バイオエタノールでデロリアンを走らせるプロジェクト：2か月で10万人が参加した。
 - オフィス内に携帯電話回収ボックスを設置。

5. 質疑応答&意見交換

5つの企業・団体の情報提供、ならびに、全体的な内容について、ジョーンズ氏も交え質疑応答や意見交換がなされた。主な意見を以下に示す。

Q.中島氏から、環境負荷を減らし、かつ、コストも減らさなければならない、という話があった。中島氏のご提案は、それを実現するための方法ということか？（崎田）

A.その通り。経済原理として、環境負荷を減らすならば、当然コストも減らさなければな

らない。その前提の下でイベントの企画・運営に関わることで、そのような仕組みを作ることが可能だと考えている。(中島氏)

→現実的なビジネスモデルとして、どうしたら実現可能なのか、今後提案していただければありがたい。(崎田)

●ジョーンズ氏からの、5団体の発表を聞いてのコメント

- ・ イベントの基本的な目的は、参加者がわくわくすることである。参加者の目的と、環境負荷削減という目的がずれることもある。できるだけ資材等を減らすのと同時に、参加者の満足度を高めることが大切だ。
- ・ ステークホルダーを巻き込んだワークショップを開き、コスト削減、資材を減らすどのような機会・方法があるかを話し合う必要がある。その上で、最大限の成果を出す工夫をしていく。そのことが、結果的にコスト削減にもつながっていくだろう。
- ・ 中島氏からリユースカップの話があったが、欧州でもリユースカップの使用は増えている。環境負荷削減の観点からは、リサイクルよりもリユースのほうが好ましいのだが、ロンドン五輪では、堆肥化可能なカップを活用した。そのほうが、ごみの分別収集がしやすかったためだ。
- ・ 様々な組織や人にアウトリーチ活動をしていくことも大切だ。聖火リレーは日本全国を回るので、アウトリーチの大きな機会になろう。イギリスでは、ロンドンとその他の地域は対立関係にあるのだが、聖火リレーが全国各地を回ることによって、ロンドンだけの大会ではなく、国全体の大会なのだという意識を広めることに役に立った。
- ・ 五輪開催前に、世界各国の選手が日本に来てキャンプをすることになるが、キャンプ地は東京以外になるだろう。各国の選手と日本各地の人たちが接する機会となる。例えば、各地の学校で、選手と生徒の交流も可能だ。また、様々な取り組みを通じて、二酸化炭素削減に貢献することもできるだろう。特に途上国との関係で、地域社会が様々な取り組みをする機会となろう。
- ・ 五輪そのものは閉鎖されたイベントではあるが、ロンドン五輪の際は、ゴールデンマイルという考え方、場所を用意した。五輪施設の周囲で、観光客がその地域の方と交流できるような取り組みを行った。
- ・ 多田氏から紹介のあったバイオメタンのプロジェクトは非常に興味深い。生ごみからエネルギーを取り出すことは、嫌気プロセスを用いて比較的簡単に実現可能である。リオ大会では、堆肥化を通じてメタンガス生成をするだけでなく、その堆肥を使うことも目指している。
- ・ 日本環境設計から説明があった、携帯電話からメダルを作る取り組みは、大変興味深い取り組みだ。市民から使用済み携帯電話を回収する仕組みが実現できるよう祈っている。組織委員会のイニシアティブは、そのためにも、非常に重要だ。

Q. ジョーンズ氏から、地域の学校で選手と交流するという話があったが、こどもエコクラブでも全国的な取り組みを考えているのではないか？（鬼沢）

A. こどもエコクラブには、全国 2000 クラブ、12 万人の会員（主に小学生）がいる。それぞれのクラブがボランティアで環境活動をしている。環境活動を通じて、子供たちがいい大人になる（生き方を学ぶ）ことを目指している。本日の提案は、今後の日本にどう役立つか、という視点で話されていた。我々と、目指すところが合致していると感じた。こどもエコクラブとしても、子供たちが、「五輪に何らかの形で参加した」というレガシーを残せるように、いろいろな団体と協力していきたい。（末松氏）

Q. 岩元氏からは幼稚園での携帯電話の回収事例が紹介されていたが、こどもエコクラブと連携することも考えられるのではないか？（鬼沢）

A. お話を聞いて、ぜひ一緒に取り組みたいと思った。メダルを携帯電話から作るというのは夢のある話なので、ぜひ実現したい。（岩元氏）

● 今までご発言のない方々からも、ご意見をいただきたい。（鬼沢）

- ・ マクドナルドは、容器包装の紙の部分は森林認証 100% を目指して動き始めている。2020 年までに 100% を達成する予定である。（高橋氏）
- ・ 皆様と意見交換し、また、皆様の動向を見ながら、我々の進むべき方向性を考えていきたい。（高橋氏）
- ・ レガシーとして、「捨てない心」「拾う心」が定着できるような活動ができれば、と考えている。具体的な内容の検討は進んでいないが、そういう気持ちで取り組みたい。（高橋氏）
- ・ 皆様の取り組みは非常に素晴らしいと感じた。リサイクル、環境設計など、取り組むべきことはたくさんあるが、1つ1つ取り組んでいきたい。（余伝氏）
- ・ 五輪のためになると、水素自動車、自動運転など、技術を示すことが第一に出てしまう。ただ、それだけでなく、資源循環の側面もしっかり訴求していきたい。（余伝氏）

Q. 五輪開催によって、交通渋滞が起こる、大気が汚れるなどのネガティブな効果がもしあるのならば、紹介してほしい。（江ノ島にセーリング競技場ができることで、今までのようにサーフィンができなくなるのではないか、という懸念がある）（中川氏）

A. ロンドン五輪は、「持続可能な五輪の実現」を目標に掲げたが、今までの五輪にない目標だったので、低い目標から取り組み始めた。環境を破壊せず、逆に、改善に貢献することを目指した。コミュニティの再生にもつなげたいという思いがあった。五輪のサイトの1つで、様々な産業が150年にわたって続いてきた地域がある。汚染された河川が近くを流れていた。元からあった緑はなるべく残し、汚染された地域はいろいろな施設を作ることで再生し、地域の事業者や住民に喜んでもらうという形で開発を進めた。

セーリングの競技場は、ロンドン南部の港に建設された。港周辺は非常に汚染が進んでいたが、五輪を機に環境が回復し、今ではカキが捕れるようになった。

海周辺の競技場では、プラスチック包装が大きな問題になりうる。お菓子の個包装、コーヒーミルクのカップなどの小さなプラスチックごみは、風に飛ばされ、海に飛んでいき、食物連鎖の中に入り込んで、大きな問題を引き起こす。問題解決のために、ロンドン五輪では、小さなプラスチックの容器包装は、リサイクルすることができないならば使わないようにする、という方針にした。

ロンドン五輪では、これらの取り組みについて、正しい意図に基づいてポリシーを打ち立てることはできた。ただ、それが全て実現したかという点、必ずしもそうではなかった。何かを取る組むときは、必ず失敗があるという前提に立たなければならない。同時に、失敗から学ぶこともできる。(ジョーンズ氏)

6. オブザーバーからの感想・その他

○川上氏（環境省）

- ・ ステークホルダーとの連携の重要性を改めて感じた。ステークホルダーそれぞれの思いがある中で、組織委員会がイニシアティブをとり、関係者が汗をかきながら取り組んでいくことが、五輪の成功につながるのではないかと。
- ・ 五輪は、日本のすばらしさを PR する機会でもある。本日も、リユース食器、バイオガス燃料、メダルなど、様々ないい取り組みが紹介された。また、日本人のごみの分別意識を PR する機会にもなる。
- ・ そのためには、若い人をいかに巻き込むかが大切になる。また、それらの取り組みに子供が参加することが、五輪のレガシーにもなるし、将来の日本にとっての大きな財産にもなるだろう。

○林氏（東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会）

- ・ このような場を設けていただいたことに感謝申し上げたい。
- ・ 8月1日から、持続可能性に配慮した運用計画のパブリックコメントを開始した。運用計画は、現時点では定性的な表現に留まっている部分も多い。来年12月を目途に、具体的な政策、数値目標等を入れ込むべく取り組んでいる。
- ・ 残された時間はそれほど多くはない。本日もお越しいただいた方々には、今後個別でご相談させていただくこともあると思うが、引き続きご協力をお願いしたい。

○本橋氏（東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会）

- ・ ロンドン五輪同様、東京五輪も外部ステークホルダーのお力をお借りすることになるだろう。本日の皆様のお話を聞き、非常に心強く感じた。どうしたら実現できるのか、と

いう観点のご提案もあった。今後もご協力をお願いしたい。

○最後に

- ・ 今年度は、あと 2 回、会議を開催したいと考えている。本日話し合われた内容をより深め、また、新たな視点からの検討を進めるため、皆様のご協力をお願いしたい。(崎田)
- ・ リオのパラリンピックを視察する予定である。また、組織委員会の方も、リオ五輪を視察されることと思う。それらの報告も考慮し、次回は 10 月上旬に話し合いの機会を持ちたい。(崎田)

以上